

影印本環境における訓点研究の問題点

小助川 貞 次

富山大学人文学部紀要第 64 号抜刷

2016年2月

影印本環境における訓点研究の問題点

小助川 貞 次

はじめに

第110回訓点語学会（平成26年5月25日）において、石塚晴通教授が「原寸・原色影印本に基づく訓点語研究」について発表され、近時相継いで出版されている影印本¹⁾を利用した訓点語研究の有効性について具体例を挙げて説かれた。これらの影印本（「原寸原色」「高精細カラー版」）が従来のモノクロの影印本と比べて、精密度、特に「原色」である点において比較にならないほど優れていることは、訓点研究を行ったことがある者であれば誰でも容易に理解でき、訓点研究は今後格段に進展することが期待される。

しかし一方で、これまで原本閲覧が決して容易ではないという環境の中で公表されてきた解説文については、影印本を利用した検証作業を行うことが可能かつ必要となってくることも明らかであり、国語史の記述に変更が生じることも可能性としてはあり得る。さらに、いかに精密な影印本であってもまったく問題点が無いわけではない。第一に、近時刊行されている影印本は原装ではなくすべて冊子体である。原装が卷子本であれば、頁概念がなかったところに新たに頁を作ることになり、「まく」から「めくる」へという行為が発生し、特に頁跨ぎの部分では原装の連続性が失われることになる。第二に、精密な影印方法であればあるほど、研究者にとって原本閲覧の機会から遠ざかることになる。訓点資料は平面構造ではなく、[初期本文 → 読解活動 [本文校訂レベル → 注釈レベル → 読解加点レベル] × n回 → 現状] という物理的な厚みと時間軸とを重ね合わせた立体構造を持ち、原本でも注意深く観察しなければ見落とされる事象は多い。影印本だけに寄りかかることは、常に危険性を伴うことを認識すべきである。第三に、これは影印本利用であるか原本閲覧であるかに拘わらず、訓点研究という目的（先入観）を持っている限り、見落とされてしまう事象が多い。例えば虫損や紙継・折目部分をどう把握するかは、当該資料の伝承過程を知る重要な材料となる場合があるし、漢文本文の書写態度は加点者の本文認識と関わり、訓点の発生そのものに影響を与えることもある。

本稿では、訓点資料は重層性を持つ立体構造であるという基本認識の上に立って、これらの問題点について、近時刊行された東洋文庫善本叢書第5巻（勉誠出版、2015年2月）所収の国宝毛詩²⁾を取り上げて具体的に論じ、新たな訓点研究の方法を探りたい³⁾。なお本稿で取り上げる用例については、すべて上記善本叢書で検証可能なので、図版は掲げない。

1 これまでと何が違うのか

1.1 モノクロでは識別できなかったこと

朱点と墨点の識別は言うまでもなく、重なり合う加点の先後関係や漢字字画内の加点、微細な加点、また古写本の常として存在する虫損とヲコト点・声点との識別、淡い色の加点内容など、多くの情報を手にすることができるようになった。かつてのモノクロ影印本においては、例えば古典保存会「春秋経伝集解巻第十」（1932年）の解説で山田孝雄が「朱書の箇所は写真にては稍淡色を呈するが故に略これを認めうべし」と述べたように、濃淡を手がかりに朱墨を識別できるとしてきた。しかし実際には、原本閲覧の豊富な経験と、その経験から導き出される「～に違いない」という予測、加点内容の正しさなどから総合的に判断することが求められるのであって、モノクロの世界で朱墨を識別することは山田孝雄が言うほど簡単ではない。

例えば、国宝毛詩・山有樞「楽」（34行目）は、京都帝国大学文学部景印旧鈔本（以下景印旧鈔本）では字画右下に二つの点が見えるが、東洋文庫善本叢書（以下善本叢書）では内側のやや大きめの点が朱点の入声点で、外側の点は虫損であることが明瞭に確認できる。また同じく「晋」（22行目）の字画内の朱点ヲコト点「の」は、景印旧鈔本では字画に重なってまったく見えないが、善本叢書では明瞭に確認できる。

さらに、モノクロでは「汚れ」と見える部分が実は重要な意味を持っている場合もある。国宝毛詩に陸徳明經典釈文からの引用書込があることについては、すでに沼本克明（1982）、石塚晴通（1983）、原卓志（1987）の諸研究に詳しいが、朱書と墨書の違いについてはこれまで論じられることがなかった。經典釈文（通志堂本による）からの引用書込の概要は以下の通りである。

引用書込：57例（掲出項目113例、掲出字のみの「揚之水」「羔裘」の2例を除く）

朱書書込：47例（27行目「莖」から106行目「罷倦」まで、すべて該当本文の右下）

墨書書込：10例（2行目「蟋蟀」から25行目「洒」までの7例は上下欄外、105行目「何怙」から110行目「翻也」までの3例は該当本文の右下）

朱書による書込と墨書による書込は重複することがなく、またそれぞれの例数から見て墨書は朱書を補うものであると考えられる。ところが、それぞれの書込位置を見ると、朱書はすべて該当本文（掲出字）の右下に寄せて書き込まれているのに対して、墨書は巻首にあっては上下欄外（7例）、巻末にあっては朱書と同様に該当字の右下に寄せて書き込まれている（3例）。巻首の墨書が書込位置を上下欄外に取るのは、本文が墨筆で書かれているために、これを避けていると考えることができる。しかしそうであれば、なぜ巻末の3例だけが本文右下に書き込まれているのか説明できない。その上で、墨書書込が対象としている本文を子細に観察すると、

巻首の6例（初例の「蟋蟀」は虫損があるので確認できない）は本文右下に朱書を擦消したような跡が見える（これらの部分の紙背「両部儀軌」には朱書は使われていないから、裏写りではない）。一方、巻末の墨書書込の3例のうち、「音戸」（鴛羽「何怙」105行目）の右傍には朱書の擦消が見えるが、「戸郎反」（同「鴛行」110行目）、「戸革反」（同「翻也」110行目割）にはそのような擦消の跡が見えない⁴⁾。以上の観察をもとに経典釈文からの引用方針を推測して纏めれば次のようになる（モノクロの景印旧鈔本ではこのような考察は不可能である）。

朱書には巻頭から巻末まで全巻を対象に書込（もしくは声点の加点）を行う段階があった。その後、墨書は巻頭から先行する朱書の書込を擦消しながら、上下欄外に改めて同じ内容を書込む作業を行ったが、その作業は山有樞の小序（～26行目）までで中断し、巻末の鴛羽末尾部分（105行目）にだけ、朱書を補う形で該当本文右傍に書込を行った⁵⁾。

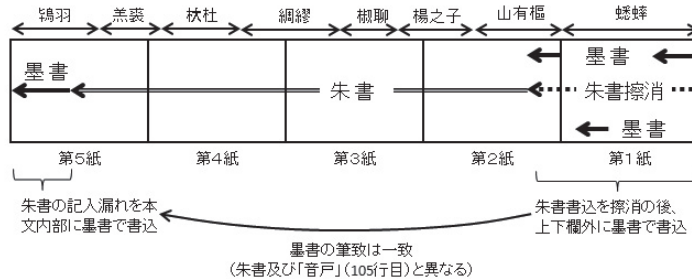


図1 経典釈文からの引用書込方針の違い

1.2 公表された解説文の検証作業

国宝毛詩について公表された解説文は、石塚晴通「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」（『東洋文庫書報』第15号、1983年）付載の釈文（原本通りに本文の配行・字詰めを保ち、これに解説した訓点を記載する形式）が唯一である。これを善本叢書によって点検して行くと、補訂すべき点がいくつか見つかるが、ここでは山有樞・小序（24行目）の「有朝廷」のヲコト点の例を示す。前記釈文では「有」に朱ヲコト点「と」のみを認めて「朝廷有（レ）と（モ）」としているが（34頁）、善本叢書で子細に見ると「有」の字画中に朱ヲコト点「れ」「も」を認めることができる。この小序には「有～不能用～」の構文が3回繰り返され、24行目の例は3番目に当たる。前2例（23行目）にはいずれも朱ヲコト点「れ」「と」「も」が加点されており、前記釈文でも「有れとも」と解説している。ただし、3例とも「有」字画右下に擦消されたような跡があり、「れ」とは異なる加点があった可能性もある（影印本の限界点である）。なお、景印旧鈔本では23行目の2例についても、字画内に加点されるヲコト点「も」の認定は難しい。

表1 「有」(山有樞・小序)のヲコト点

所在	本文	石塚 1983	善本叢書	景印旧鈔本
23	有財不能用	有れとも	れとも	れと
23	有鍾鼓不能以自樂	有れとも	れとも	れと
24	有朝廷不能洒掃	有れ(トモ)	れとも	と

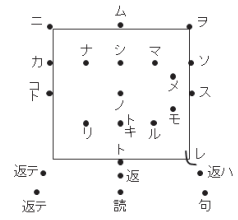


図2 ヲコト点図

1.3 公開されている高精細画像と影印本の比較

画像データベースが公開されているものにおいては、影印本と画像との比較も可能である。東洋文庫善本叢書に含まれる漢籍のうち、岩崎本については「岩崎本善本画像データベース」においてマイクロフィルムをベースとしたモノクロの画像が公開されているが、粗い画像であるため善本叢書とは比較できない。一方、京都国立博物館所蔵の岩崎本日本書紀、吉田本日本書紀、浄名玄論については、「e 国宝」(国立博物館所蔵国宝・重要文化財)に部分的にはあるが高精細画像が公開されていて、影印本と比較することができる。特に岩崎本日本書紀においては、過去にも影印本が刊行されており、さらに原本の訓点を正確に解説した釈文も公開されている⁶⁾。利用者・研究者にとって選択肢が増えることは重要なことであるが、それぞれが想定している利用者は異なることが予想され、一概にどちらがいいとは言えないし、そもそもどれが一番原本に忠実なのかという新たな問題も発生する。

2 影印本環境の問題点

2.1 原装ではない

近時出版の影印本はいずれも「原色」「カラー」と銘打っている。原本の色彩に限りなく近づくことは、利用者のみならず所蔵者にとっても重要なことであるが、たとえ原本であっても閲覧環境の光線の加減によっては異なって見えることがあると考えるべきである⁷⁾。より重要な問題点は、これらの影印本が原装ではなくいずれも冊子体になっていることである。冊子体による影印出版はかつてもあったし(京都帝国大学文学部景印旧鈔本、古典保存会複製本、前田育徳会尊経閣叢刊、天理図書館善本叢書など)、原装が卷子本であるものは、むしろ冊子体になった方が扱いやすいのも事実である。しかし、原装が卷子本であれば、「まく」という読書行為は「めくる」に変わり、原装には無かった頁概念が新たに加わることになる。その結果、頁跨ぎの部分ではテキストの連続性が途切れ、書写・加點者の視覚領域に入っていた情報(先読み/後読み)を再現することが困難になる。例えば、国宝毛詩の場合、一篇全体を一度に見

渡せることは、韻文で対句という構造にどのような加点が為されているかを把握するために重要なことであると思う。善本叢書では、蟋蟀、山有樞、楊之水、椒聊、綢繆、杖杜、羔裘、鷓鴣羽の8篇のうち、楊之水、綢繆、羔裘の3篇が「頁めくり」のために一篇全体を見渡すことができなくなっている（景印旧鈔本ではさらに分断される）。また、裏書きがある場合、表面のどの位置に対応するのかという立体感も失われる。かつて原装（卷子本）で影印出版されたものは、これらの点では非常に使い勝手のよいものであった⁸⁾。

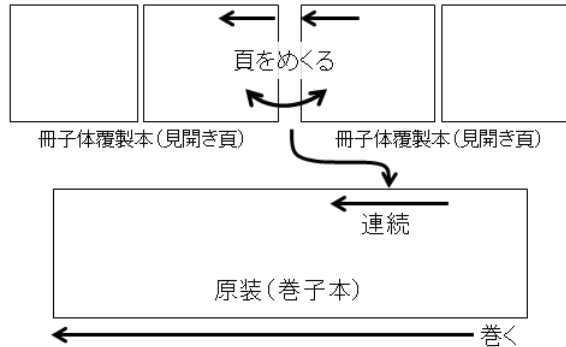


図3 冊子体影印本の頁跨ぎの問題

現状の出版環境では、出版コストと一般利用者の利便性を考え、むしろ研究者は原装であるか否かには目をつぶり、アナログ思考（連続体）からデジタル思考（離散体）に転換・順応することも必要なかと思う。どうしても新しい環境に適応できなければ、デジタル（離散体）をもう一度アナログ（連続体）に復元することも技術的には可能である。

どちらの場合であっても実際の研究、特に加点内容の精密なチェックにおいては、原装・原寸であることよりも、加点箇所を拡大した状態を維持できることの方が重要であり、結局は撮影技術・印刷技術の限界が問われることになる。

2.2 原本閲覧の機会が減少する

影印本が原本に近づけば近づくほど、原本閲覧の機会が減少することは、所蔵者・管理者だけではなく、利用者にとってもむしろ望ましいことである。所蔵者・管理者にあっては貴重古典籍を閲覧に提供することは、人にとっても古典籍にとっても大きな負担になり、利用者としてもできる限り避けたいところである。また原本を閲覧するまでに費やす様々な手続きや費用の点、時間や場所を選ばずに何度でも繰り返し利用できることを考えれば、影印本は多少高額であっても重宝する資料であることは間違いない。

一方で、原本を閲覧する機会に恵まれた者は、原本と影印本との微妙な違いについて正確に把握し、公表する義務を負うことになる。これは影印本を購入・所持している利用者に対して

単なる補足情報を提供することにとどまらず、そうすることが今後出版社が企画・製作する影印本の品質向上に繋がり、結局は研究の質的向上をもたらすことになるからである。

2.3 訓点資料は重層的な立体構造

漢籍の場合、漢文本文は伝統的な注釈書を割注として合わせ持つ構造を持ち、その周りに再注釈書が存在する。毛詩の場合には毛伝と鄭箋を割注に含んで漢文本文を作り、この毛詩鄭箋を対象としてさらに陸徳明の經典釈文と孔穎達の毛詩正義が存在する。読解者（加點者）はこのテキスト環境を理解した上で、本文校勘作業、注釈書との対照・書込作業、日本語としてのヲコト点・仮名点を加點し、毛詩鄭箋の全構造を理解する。読解レベルにおいては、読解した内容を加點しないこともある（無点処理）。このようにして出来上がった初期状態の訓点資料は、その後、幾度かの紙背利用者（国宝毛詩であれば両部儀軌の書写）、再読解者（別筆の加點、或いは伝領の記名）、修復作業の手を経て、現代に伝わる（図4参照）。

したがって訓点研究者が訓点資料を扱う場合には、注目・分析しようとしている事象が、このような重層的な立体構造のどの部分に位置付けられるのか考慮する必要がある。従来、解読文において「別筆」「別種点」「別訓」などとして扱われてきたのは、まさにこのような構造を反映するものである。重要なことは、この構造は影印本を利用するか原本閲覧に基づくかに拘わらず、いずれの場合にも存在することである。角筆点は、影印本環境ではコスト面のために再現することは難しく（技術的には可能）、構造の一部分が抜け落ちていることに注意しなければならない。仮に角筆点を除外しても、訓点資料が持っている情報は極めて多く、この情報を構造に照らし合わせながら整理・記述していくことは容易なことではなく、従来の解読文や釈文、あるいはそれに附属する訓点索引、漢字索引は基礎的な研究として意義を持つが、これらに変わる新しい研究方法が必要となる（この点については後述する）。

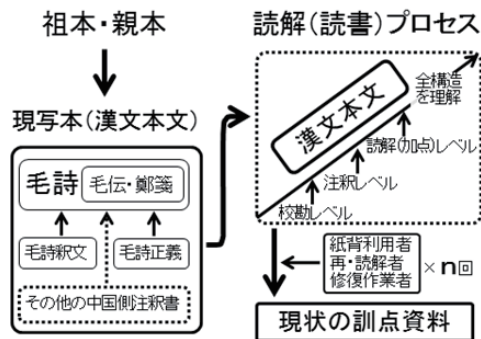


図4 訓点資料（毛詩鄭箋）の重層的な立体構造

3 訓点研究の目的（先入観）

3.1 虫損の意味

近時の影印本の刊行によって、様々な問題点を含みながらも訓点研究が確実に進展することは間違いない。しかし一方で訓点研究という網の目に掛からないような事象が特に書誌面には多く存在し、当該文献の伝承過程を知る上で重要な情報や問題になっていることがある。このことは影印本利用、原本閲覧のいずれの場合でも把握可能であり、解決に向けて取り組むことができる。何度もチェックできるという点ではむしろ影印本環境の方が向いている場合もある。

例えば、古典籍に見える虫損から、当該の古典籍がどのように継承されてきたのかが分かる場合がある。国宝毛詩の2行目「刺晋」から111行目「豎」までには、上界線から3.8糎程下と5.0糎程下に上下に並んだ虫損が50箇所ある。ひとつの虫損から隣の虫損までの距離を測定すると、以下のように巻頭から巻尾に向かって間隔が広がっていることが分かる（測定値は善本叢書上での数値）。巻いてある状態であれば、中心（軸）から遠いほど一巻き当たりの円周は長くなる（図5参照）。つまり、ある虫損から次の虫損までの間隔で考えれば、虫損間隔の長い方が巻首に近く、逆に虫損間隔の短い方は巻末（軸）に近いことになる。本書の紙背には平安時代・治安元年（1021）の奥書をもつ両部儀軌が表の毛詩とは逆方向に書写されている。この虫損間隔の変化から考えるならば、毛詩巻首の裏側にある両部儀軌末尾を巻尾（軸位置）にして、毛詩の巻尾に向かって巻き取っていった状態で虫損が発生したことになる。つまり国宝毛詩は、ある時期まで紙背の両部儀軌の方が表の状態になっていたことが分かる。

表2 虫損間隔測定値

測定位置	間隔（糎）
002～004	3.9
023～025	4.7
045～048	5.4
064～066	5.9
084～086	6.4
097～100	6.9
108～111	7.3

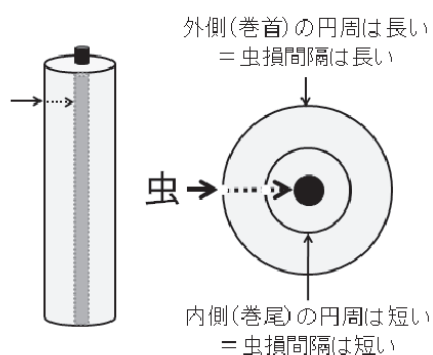


図5 巻いた状態での虫損間隔

国宝毛詩の切断面や国宝礼記正義の折目の問題に関しては、石塚晴通・小助川貞次(2015)で述べたので詳しくは繰り返さないが、国宝毛詩の第5紙97～98行目にある切断面と修復状態や、礼記正義で紙継のように見える折目(山折)の跡などは両書の伝来を考える上で興味深い。

3.2 本文校勘の方針

ここでは漢文本文の書写状態に目を向けてみたい。国宝毛詩の山有樞・小序冒頭に「山有樞刺晋昭公也」（27行目）とある。この中の「昭公」は「昭公」でなければならないことは、後出の楊之水、椒聊、鵲羽ではすべて「昭公」と作り、また同文を持つ敦煌本 P.2529（8世紀中後期写）でも「昭公」、さらに春秋経伝集解桓公2年（藤井有鄰館本）に見える「昭侯」でも「昭」に作り、「照」に作る本文はこの一例しかないからである。經典釈文は「昭公」を掲出字として掲げ、「[昭公] 左傳及史記作昭侯」と注記するが、「昭」「照」の異同について何も記さない（「昭公」左傍の朱点発は經典釈文に本文異同に関する注記があることを示す。ここでは「公」と「侯」）。以上のことは「照」右傍に附された朱圈点校符の存在によって、加点者（校勘レベル）にも注意されていたことが分かる。

本書の校勘作業は、淡青色の小紙片（不審紙）を当該本文の右傍や字画内、上下欄外に貼り付け（すべて善本叢書で確認できる）、その上で墨書で正しい本文を書込む例が多い（この墨書書込が經典釈文の朱墨の書込と同一筆跡であるかは検討の余地がある）。例えば、椒聊（50行目～59行目）の経文（本行）では、「椒聊」の「椒」を古写本一般に見える写本字体で書いているが、割注内ではこれとは全くことなる異体字（以下では椒Bとする）で書いている。その異体字の右傍に淡青色の不審紙があり、さらに経文（本行）と同じ「椒」の字体を注記する。

所在	字体	校勘処置
050	椒	不審紙，注記なし
052	椒	不審紙，注記なし
052 割	椒 B	右傍に不審紙，その下方に墨書「椒」
052 割	椒 B	右傍に不審紙，不審紙に墨書「椒」を重ね書き
052 割	椒 B	右傍に墨書「椒」，その字画中に小さな剥落痕あり
055	椒	不審紙，注記なし
055 割	椒 B	右傍に不審紙，その下方に墨書「椒」，本文「椒 B」に朱圈点校符
056	椒	不審紙，注記なし
057	椒	不審紙，注記なし
059	椒	不審紙，注記なし

不審紙と字体注記とのセットは以下にも確認でき、細かな校勘作業があったことが分かる。

適（009 割）：右傍に不審紙，上欄外に墨書「過」

叙（040 割）：右傍に不審紙，その下方に墨書「叔」

- 叙 (040 割) : 右傍に不審紙, その下方に墨書「叔」
 之 (047 割) : 字画中に不審紙, 右傍に墨書「兒」
 時 (053 割) : 字画中に朱圈点, 右傍不審紙, その下方に墨書「將」
 崩 (055 割) : 字画中に朱圈点校符, 右傍に不審紙, 不審紙に墨書「朋」を重ね書き
 崩 (055 割) : 字画中に朱圈点校符, 右傍に不審紙, 不審紙に墨書「朋」を重ね書き
 怨 (092 割) : 字画中に朱圈点校符, 右傍に不審紙, その下方に墨書「悪」
 色 (094 割) : 右傍に不審紙, その下方に墨書「邑」
 損 (102 割) : 右傍に不審紙, 不審紙に墨圈点を打ち, 下欄外に薄墨「楨」, 「楨」の右下に
 朱筆「之忍反」

国宝毛詩においては、このように本文異同・字体異同に対して相当な注意を払っていながら、なぜ山有樞の「照」に対しては朱圈点校符の加点に留まり、不審紙の貼付も、正しい本文「昭」の注記もなされなかったのか。ここで考えなければならないのは、不審紙、朱圈点校符、墨書注記の順序である。52 行目割の三例目の「椒」を見ると、右傍に注記した「椒」の字画内に小さな空白がある。これは墨書の注記「椒」が不審紙の上に書かれ、後に不審紙が剥落したために生じた穴である。このことから、不審紙と墨書注記との先後関係は「不審紙 → 墨書注記」の順序であったことが分かる。また 16 行目割の「時」を見ると、字画中の不審紙の上に朱圈点が重ねて加点されていて、ここから「不審紙 → 朱圈点校符」の順序であったことが分かる。さらに、53 行目割「時」、55 行目割「崩」、55 行目割「椒」、92 行目割「怨」においては、右傍に不審紙を置き、その下方に墨書注記があり、当該本文「時」「崩」「椒」「怨」の字画中に朱圈点校符が加点されている。墨書注記をした後に朱圈点校符を加点することは考えにくく、「朱圈点校符 → 墨書注記」の順序が推定される。さらにまた 102 行目割「損」を見ると、右傍の不審紙の上に重ねて墨圈点校符があり、下欄外に墨書で「楨」と注記し、ここに朱の反切「之忍反」が書き込まれている。結局、本書における校勘処置と經典釈文からの引用・書込までの順序は、以下のように推定できる。

(初期本文) → 不審紙 → 朱圈点校符 → 墨書書込 → 經典釈文書込

一方、不審紙は全巻の経文（本行）右傍、上下欄外、割注右傍・字画内に貼付されるが、経文右傍に不審紙が貼付された例（且 (035), 焉 (039), 襍 (042), 楊 (044), 楊 (046), 楊 (049), 焉 (051), 且 (055), 且 (057), 焉 (061), 杕 (076), 杕 (078), 焉 (081), 弟 (083), 焉 (083), 杕 (084), 焉 (087), 弟 (087), 焉 (087), 祛 (091), 稷 (105), 鹽 (108), 稷 (109), 鹽 (111)) では墨書注記は存在せず、不審紙と墨書注記のセットは、すべて割注にしか存在しない。

以上のことから考えると、問題の「照」は不審紙の段階で見落とされ（或いは問題なしと判断され）、後続する朱圈点校符がこれに気付いて朱圈点を加点したものの、経文（本行）に手を加える方針ではなかったために放置されたのではないかと推測される⁹⁾。

3.3 本文校勘と加点との関係

このような本文の状態と校勘作業を見た上で、冒頭蟋蟀にある「歳聿其暮」の「暮」（7行目）に目を向けると、極小の墨書仮名点「ク」が加点されていることが気になる。朱ヲコト点に「れ」「な」「む」があり、全体として「クれなむ」と読めるが、「暮」は常用漢字表所収字（小学校6学年で修得）である¹⁰⁾。なぜこのような簡単な本文にわざわざ墨書で「ク（レナム）」と加点したのか。実はこの部分には唐代写本では「暮」、唐代以降の写本・刊本では「莫」に作る本文異同がある。

暮：国宝毛詩（7世紀末写）、敦煌本 P.2529（8世紀中後期写）

莫：經典釈文（通志堂本）、十三経注疏本（清朝）、静嘉堂文庫本（16世紀初）

本書で經典釈文が引用されていることについては前述したが、本文「暮」に対して經典釈文が「[[其莫] 音暮」と注記することは、読解者にとっては意味をなさない。敦煌本毛詩音 S.2729（8世紀中後期）では該当部分が欠損しているために、この部分に異同があったかどうか確認できないが、十世紀の漢籍訓点資料で利用された經典釈文が通志堂本とは異なる原初形のものであったことは沼本克明（1982）が論じたところである。国宝毛詩の読解者が利用した經典釈文には、「[[其莫] 音暮」の項目が無かった可能性もある。本例に不審紙や朱圈点校符が無いことも、そのような推測を支持する。しかしそうであったとしても、「暮」に常用訓とも言える訓点「ク（レナム）」をわざわざ加点した意図は、やはり理解できない。さらにこの加点が朱点ではなく墨点であることも問題で、朱点の加点段階では「読め」（無点処置）、墨点の加点段階では「読めなかった」（加点処置）ことになる。

本書では、経文（本行）に対して校勘結果を記さない方針があったのではないかと前述したが、この推定が正しいとすれば、この奇妙な加点現象には以下のような事情があったのではないかと考えられる。すなわち、この「暮」には本書の読解者の時点（10世紀初）でも「莫」に作る本文があったが、不審紙、朱圈点校符のいずれの段階でもその異同が見落とされ、その後、墨書仮名点の段階に至って初めて「暮」「莫」の異同が認識されたが、経文（本文）には直接校勘結果を記さない方針があったために、本文注記という直接的な方法ではなく、極小の仮名点「ク（レナム）」を加点することで、本文が「暮」で正しいことを示そうとしたのではないのか。加点の背景に、本文校勘とその方針が関係する例として考えなければならない例である。

4 日常の研究スタイルはどう変わるのか

近時出版の影印本環境においては、これまで把握できなかったような多くの情報を獲得することができ、訓点研究は格段に進展することが期待できるし、授業や講習会などの教育現場での活用もより容易になってくる。一方で、このような環境の出現は処理・整理しなければならない情報が急増してくることをも意味している。加点内容一つを見ても、本文の書写態度や校勘の方針など、関連づけて分析しなければならない事柄は極めて多い。これまでのように、個人的研究として行うことは勿論可能であるし、現在の訓点資料に関わる研究者の数を見れば、むしろその状態は当分変わらないように思う。

しかし、従来の研究のように原本閲覧ができた研究者が移点本と解説文を作成し、それを後進へ伝えて行くような個から個への継承環境は、原色・カラーの影印本の出現によって大きく変化することは間違い無い。つまり、若干の費用を負担すれば、誰もが訓点資料を手にすることができる状況になり（勿論原本調査や移点作業が不要になったわけではなく、また師匠から弟子への「伝授」が不要になるなどとは全く考えていない）、これまでの個人的な作業を複数の人間が影印本で常時点検しながら分担することも比較的容易になるのではないかと思われる。整理された情報は個人のものから共有財産になり、そのための作業用フォーマットも構築しておかなければならなくなる。国立国語研究所共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」（高田智和、2009年～2012年）は、本稿で論じた影印本環境が登場する以前から、このような問題に取り組んだ先駆的な研究である¹¹⁾。

すでに多くの研究者のスタイルとして定着していると想像するが、出版物としての影印本を手に入れても、机上で出版物を開くより、電子データに変換してパソコンのモニタ上で作業することがこれまでも増して多くなると予想され、画像処理（デジタル解析）技術が一層要求されてくる¹²⁾。その一方で、開くファイルの数が多くなれば一台のパソコンでは処理しきれなくなり、モニタを何台も繋げた状態で作業することになり、結局机の上に積み上げていた書籍の山がモニタの数に変わるだけかもしれない。それでも、本稿で述べた「重箱の隅をつつく」とでも言えるような観察と議論が、全て影印本環境で可能であることは、訓点研究に従事する者にとって重要な変化であると思う¹³⁾。

注

- 1) 2013年以降に出版された調点資料が含まれる主な影印本は以下の通り。国宝西大寺本金光明最勝王經天平宝字六年百濟豊虫願經(原寸原色, A3判変形・372頁, 勉誠出版, 2013年9月)。京都国立博物館所蔵国宝岩崎本日本書紀(原寸原色, A3判変形・120頁, 勉誠出版, 2014年1月), 京都国立博物館所蔵国宝吉田本日本書紀(原寸原色, A3判変形・396頁, 勉誠出版, 2014年2月), 京都国立博物館所蔵国宝浄名玄論(原寸原色, A3判変形・320頁, 勉誠出版, 2014年4月)。東洋文庫善本叢書(原寸原色, 勉誠出版, 以下書名と版式・頁数, 出版時期), 国宝史記夏本紀秦本紀(変形判・108頁, 2014年9月), 梵語千字文/胎藏界真言(変形判・86頁, 2015年1月), 国宝毛詩/重要文化財礼記正義卷第五残卷(変形判・120頁, 2015年2月), 国宝古文尚書卷第三・第五・第十二/重要文化財古文尚書卷第六(変形判・168頁, 2015年6月), 国宝春秋経伝集解卷第十/重要文化財論語集解文永五年写卷第八(変形判・112頁, 2015年7月), 国宝文選集注卷第四十八・第五十九・第六十八・第八十八・第百十三(変形判・424頁, 2015年10月), 重要文化財論語集解正和四年写(変形判・384頁, 2015年12月)。新天理図書館善本叢書(高精細カラー版, 八木書店, 以下書名と版式・頁数, 出版時期), 日本書紀乾元本1神代上(菊倍判・192頁, 2015年4月), 日本書紀乾元本2神代下(菊倍判・192頁, 2015年6月)。
- 2) 唐代7世紀末写, 平安中期延喜頃(901-923)の加點。卷第6唐風詠訓傳第10の前半の蟋蟀から鴝羽まで8篇, 113行が存する。解題は石塚晴通・小助川貞次による。本書については, 京都帝国大学文学部『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』第1集(1922年)にコロタイプ印刷による複製が収録され(モノクロ), 全巻の解説文(釈文)が石塚晴通「岩崎本古文尚書・毛詩の調点」(『東洋文庫書報』第15号, 1983年)に公表されている。
- 3) 本稿では, 原本の複製物に関して紙媒体のものを影印本(影印資料), 電子データとして閲覧できるものを画像と呼ぶ。国宝毛詩に関しては調査の過程で原本及び東洋文庫善本叢書解題執筆に際して勉誠出版から預かった電子データを利用したが, すべて東洋文庫善本叢書の図版で確認できるものである。
- 4) 墨書書込の中では「音戸」だけが他の9例と異なり僅かに筆太で, 特に卷末の3例で見ると「戸」の初画が110行目の二例では点で記されるのに対して105行目の例では横棒になっている。
- 5) このような墨書の書き換え行為は一見して「無駄」なように思われる。該当本文の左右周辺に音注や調点などの解説情報が書き込まれる場合と, そのような書込・加點がない場合とを比べて見ると, 後者はより白文(無点)に近づき, 読みにくい難解なテキストになってしまうからである。しかし, そのような解説情報を敢えて消去してでも難解なテキストが必要となる場面もあり得るのではないか(例えば試験準備など)。上下欄外の位置は該当本文周辺とは異なり, 紙を当てることで簡単に掩い隠すことが可能な位置である。なお卷末の朱書「音皮」(「罷倦」106行目割)以降で經典釈文が掲出字を掲げるのは, 墨書反切が書き込まれている二項目, すなわち「鴝行」(110行目)と「翻也」(110行目割)だけである。
- 6) 『秘籍大観』第1集(大阪毎日新聞社, 1926年, コロタイプ複製), 『複製日本古典文学館』第1期第2回・3回(日本古典文学刊行会, 1972年, カラー複製), 『日本書紀 東洋文庫蔵岩崎本』(築島裕・石塚晴通編, 貴重本刊行会, 1978年, 釈文)。
- 7) 稿者は, このことを敦煌文献の閲覧において何度も経験してきた。詳しくは小助川貞次(2008b)を参照されたい。また, 角筆点に関しては特に閲覧環境の影響を受けやすいことは言うまでもない。
- 8) 唐写本の漢籍の紙背には聖教が書写されるケースが多いが, この場合, 紙背の聖教の分量に合わせたかのように表面・漢籍の紙数が調整(切断)されていることがある。表裏とも一卷に仕立てられた影印本は, このような観点が非常に把握しやすい。小助川貞次(2000)・(2008a)を参照されたい。なお, 春秋経伝集解卷第二の影印本『唐鈔本左伝残卷雙林善慧大士小録并心王論』(有鄰館, 1930年)は春秋経伝集解と紙背の雙林善慧大士小録が別仕立てである。
- 9) 「政」(100行目)の左辺中央部にも朱圈点があるが, この例では經典釈文に「[政役]音征篇内注同」とあり, 「音征」にしたがって「平軽」の声点を加點したのか(沼本克明(1982)によれば国宝毛詩の

声点は四声体系とされる)、「政」と「征」との本文異同を示したのか(静嘉堂文庫本(室町時代永正～天文年間加點講書本)、敦煌本 P.2529 は「征」に作る)、判断が難しい。なお、不審紙を貼付せずに本文(経文)に墨書注記した例は「崩／朋」(54)と「鹽／鹽」(104)の二例がある。

- 10) 「暮」は観智院本類聚名義抄(仏中 52 オ)には「ユフヘ」「ヨフヘ」「オソクス」「クレヌ」、築島裕『訓点語彙集成』には「オソシ」「クル」「クレ」「ヒイグレ」「ヒグル」「ユフグレ」「ユフベ」を掲載する。「暮」の「くれなむ」のうち、助動詞「なむ」については、毛詩正義「是歳晩之候歳遂其將欲晩矣」が背景にあったともと考えられる(石塚晴通・小助川貞次(2015)) 108 頁参照。
- 11) 高田智和・小助川貞次編(2013)。なお、2000年に韓国で角筆による点吐口訣資料が発見されたとき、解説に参加していた韓国の研究者は精密に撮影されたカラー画像を共有し、点吐口訣(ヲコト点)を座標軸上に位置付ける客観的な方法や解説結果を記述する方法を考案しながら、解説結果を互いに持ち寄って研究会の場で解説文を作成していた。
- 12) デジタル画像であることは単にパソコンのモニタ上で閲覧できるということではなく、例えば特定の色彩の加點だけを抜き出したファイルを作成したり、それをもとに加點段階を再構成したりする「解析」が可能かつ必要であることを意味する。理工系・情報工学系の研究者との共同研究が強く期待される。
- 13) 稿者の授業を履修している学生(2年)が「小さなことに気づく感性と、そのことを立証するための多くの知識が必要だということを改めて感じました。」(2015年4月20日)と感想をもらしたが、環境は変わっても訓点研究のマインドは結局ここにあると思う。

参考文献

- 沼本克明(1982):『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院)
- 石塚晴通(1983):「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」(『東洋文庫書報』第15号)
- 原卓志(1987):「毛詩唐風平安中期点における經典釈文の利用－声点・点発を通して－」(『国文学攷』第114号)
- 小助川貞次(2000):「天理図書館蔵五臣注文選卷第二十の問題点」(第83回訓点語学会、→科研報告書「日本国内に現存する文選古鈔本の原本調査に基づく文選訓読についての総合的研究」, 2002年)
- 小助川貞次(2008a):「訓点資料の展開史における有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』の位置」(『日本語の研究』第4巻第1号)
- 小助川貞次(2008b):「敦煌加點本を巡る研究課題」(『富山大学人文学部紀要』第49号)
- 高田智和・小助川貞次(2013):「訓点資料の構造化記述成果報告書」(国立国語研究所共同研究報告12-08)
- 石塚晴通・小助川貞次(2015):「毛詩解題」「礼記正義」書誌解題」(『国宝毛詩 重要文化財礼記正義卷第五残卷』, 東洋文庫善本叢書5, 勉誠出版)

附記

本稿は第112回訓点語学会研究発表会(2015年5月10日・京都大学文学部)における発表原稿をもとに書き改めたものである。国宝毛詩の閲覧においては東洋文庫から格別なるご配慮をいただき、また『東洋文庫善本叢書』第5巻の解題執筆においては勉誠出版から画像を貸与していただいた。記して感謝申しあげる。

